

おうちで実物資料を観察する 『おうちで自然観察』の報告 ～自然史系博物館の社会的役割を考える～

鳥取県立博物館 学芸課長 川 上 靖

1. はじめに

2019年12月に発生した新型コロナウイルス感染症の世界的流行による災難や危機的状況（以下、コロナ禍）は、さまざまな社会変化を引き起こしている。こうした変化の中には、コロナ禍収束後もさらに変化が進むものもあると言われている。また、コロナ禍は、ライフスタイルや働き方などの変化だけでなく、人々の価値観や自然観の変化にも影響を与えている。

日本の博物館においてもコロナ禍による変化が生じているが、これまでの変化の多くは感染拡大防止を目的としたものである。具体的には非対面・非接触の展示や活動、オンライン形式の講座、インターネット上でのバーチャル体験（バーチャル・ミュージアム）、コンテンツ配信などである。これらは基本的に密や接触の回避策、言い換えると博物館活動を提供するうえでの「手段」の変更であり、博物館活動の中身は大きく変わってはいない。北海道博物館が提唱して全国的に広がった『おうちミュージアム』も、その中のプログラムの多くは活動や支援サービスを提供する「手段」の創意工夫である。

一方で、本大会（第29回全国科学博物館協議会研究発表大会）のテーマ『博物館の社会的役割を考える』にもあるように、コロナ禍を契機に博物館の役割そのものを考え直そうという動きも出てきている。

鳥取県立博物館では、新型コロナウイルス感染症流行の第1波（2020年春）のときに、自然担当のスタッフが『おうちで自然観察』と題した緊急特別連載をホームページとフェイスブックで行った（図1）。これは、密や接触の回避は当然だが、これまでの活動を手段を変えて提供するのではなく、自粛期間で家から動けないことを利用して、これまでとは違った視点による活動を試みたものである。お家にあるものを実物の自然資料として捉えるだけでも、新しい発見があるのではないかと企画したものであるが、お家に普通にあるものを「自然」として観察することで、自然とは何かを考えるきっかけにしていくことも目論んだ。

本報告では、このような狙いで行った『おうちで自然観察』の概要と参加者の反応を報告し、博物館、とくに自然史系博物館の社会的役割について議論したい。



図1. 『おうちで自然観察』のバナー
（これは現在のアーカイブのもの）

2. 『おうちで自然観察』の内容

鳥取県立博物館は、新型コロナ第1波により2020年4月13日（月）～5月6日（水）の期間、常設展示室を閉室した。なお、ショップとレストランは開店、他団体が主催の展覧会は開催を続けた。『おうちで自然観察』は、この常設展示室が閉じている期間の代替サービスとして企画した。

企画にあたっては、お家で自粛している間に気軽に楽しめ、かつ知的好奇心をくすぐることをめざし、次のことを条件とした。観察内容は、①お家と庭の範囲内に限定し、②ほとんどのお家に普通にあり、③地学と生物に関するもので、④ユーモアも交えることとした。提供方法は、①ホームページとフェイスブックに同内容をアップロードし、②写真は1枚のみ、③文字数は200字以内のコラム記事とした。これは1分以内で読み切れるようにしたものである。各コラム記事は、当館の学芸課自然担当の学芸員・専門員であるスタッフ8名（地学3名、生物5名）が、それぞれ観察内容を考え、写真と文章を用意した。

提供期間は、先に述べた常設展示の閉室期間に合わせた2020年4月15日（水）～5月22日（金）で、「緊急特別連載」と題して1～2日間隔でアップロードし、計25回掲載した。

図2に、連載コラムの2回分を載せた。取り上げた観察対象は、地学では紙やすり、硯、基石など、生物では食材としての魚介類や植物、侵入害虫や不快害虫など、お家内の身の回りにあるものとしたが、お家の中にいて聞こえる音や見えるものも扱った。また、関心を広げ、理解や思考を深めるために、適宜、他のWebサイトのリンクを付けることも行った。

この緊急特別連載『おうちで自然観察』は、連載終了後もアーカイブとして残し、当館のホームページから見るができるようにしている。URLは以下のとおりである。

<https://www.pref.tottori.lg.jp/ouchideshizenkansatu/>
（「おうちで自然観察」で検索いただいてもよい。）

【3】貝の中に小さなカニ！



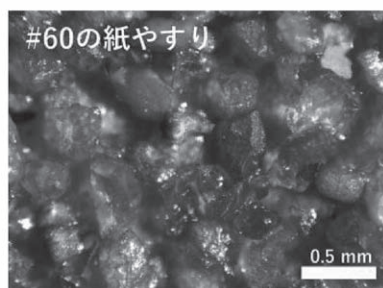
アサリのお味噌汁や酒蒸しを食べていて、小さなカニが出てきたことはありませんか。カニの子どもが貝に食べられたのでしょうか？これは「ピンノ」というカニで、これで大人です。貝に食べられたのではなく、小さな赤ちゃんのときに貝の入水管から入り、貝の中で暮らしています。

甲羅もハサミもあるので観察してみてください。ほとんどがメスです。オスはとっても小さく、貝を出たり入ったりしています。

食べても大丈夫ですが、カニの味がするかどうか？（川上靖）

2020年4月17日

【4】DIYの基本アイテム「茶色の紙やすり」は宝石がいっぱい！？



茶色の紙やすり（サンドペーパー）をルーペで見てください。

赤茶色の粒々はガーネット（ザクロ石）という鉱物です。宝石としても有名な石ですね！とっても硬いのでやすりの研磨材に使われます。やすりの裏に表示されている数字が小さいほど、大きなガーネットがついていますよ。

紙やすりを水でぬらすとガーネットの粒を取り出せちゃいます。やすりは使えなくなっちゃいますけどね（笑）（金山恭子）

2020年4月19日

ガーネットについて詳しくはこちら→[ジオフィールドVol.13](#)

図2. コラム記事の例（第3回と第4回）

3. 『おうちで自然観察』を実施して考えたこと

1) 『おうちで自然観察』を企画する中で気づいたこと

観察対象の選定では、スタッフ同士が話し合うことが多くあった。これは、自然観察の対象をお家の中から探すということで、自然担当のスタッフ自身が「自然」の定義を再考せざるを得なくなったためと思われる。

近年は、『「自然」という幻想』（草思社／2018）*などの出版にみられるように、自然や自然保護の考え方にも変化がみられる。これまで、人間の影響のないものが純粋な自然であり、それを取り戻すため、回復するため、人間の影響を排していこうという考えが主流だったが、こういった「手つかずの自然」は幻想であり、存在しないという考え方である。自然史系博物館にとって「自然」をどのように定義しているのかは根幹に関わることである。今回、『おうちで自然観察』を企画実施したことで、「自然」を再考することの重要性に気づけたのは収穫であった。コロナ禍による自粛により、お家の中で自然を探してみたわけだが、お家には自然がたくさんあった、というよりもお家も人間も自然の一部だったということかもしれない。

2) 参加者の反応とそこから考えたこと

『おうちで自然観察』へのアクセス数は、フェイスブックのリーチ数をみると、ひとつのコラム記事で1,000件前後、最も多いもので1,600件だった。この数は、当館の他の投稿記事と比較して多い方である。その他、コメントを書かれる方が多かったのも特徴であった。コメントは大きく2種類に分けられ、ひとつは新知見への驚きや喜びで、もうひとつはこの企画への応援と期待であった。以下にいくつか例を示す。

前者の例：「へええ、今度見てみます。このシリーズ好きです。」「まじか！」「人には悪さしないんですね？ よかったです。」「お！お庭の玉砂利は岩石博物館とは！」「この発想はなかった（笑）」など。

後者の例：「いつも楽しみにしています！」「毎回密かに楽しみにしている鳥取県博さん！今後も期待しています！」「面白い。good アイディア」「素晴らしい取り組み！」「このようなことに興味を持つ子供たちが増えるといいかも。」「すごく良かったです！私たちのページでもシェアさせて頂いたのですが、全く知らない方から、すごく良かったよ！とメッセージを頂きました。私も勉強になりました！」「最終回 面白かったので残念です（´△`）」「好きな連載が最終回 とても良かったです。」など。

連載を見ていただいた方々の反応から、まず感じたことは、野外（山や川など）へ出かけなくても、自然への驚きや発見を得ることはできるということである。それに加えて、これまで自然物と認識していなかったものから自然を発見することで、「自然」とは何かを考えるきっかけにもなり得ると思われた。

参加いただいた方々の住居地をみると、鳥取県の方はもとより、広く全国各地に及んでおり、ご自身の地域と鳥取県を比較してのコメントもみられた。今回の『おうちで自然観察』は常設

展示室が閉じている期間のみに代替的に行ったものであったが、フェイスブックなどの SNS は、広く当館を知っていただくのみならず、地域間の交流を生み出すことにも有効であり、展示や講座などとは異なる目的で利用していくことにも一理あると思われた。

4. おわりに ～自然史系博物館の社会的役割を考える～

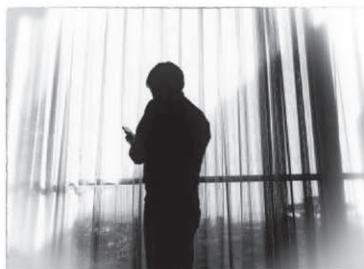
この度、『おうちで自然観察』を実施してみて、SNS の提供手段としての有効性は間違いなく高いものであると確認できたが、それ以上に収穫だと感じたことは『おうち』で自然を探求することの意義である。この緊急特別連載の最終回の内容は決めていなかったが、連載を続ける中で最終回はお家にいる人間の観察にしようと思い至った（図 3）。お家の中にもさまざまな自然があることを紹介していったわけであるが、どれをとっても人間の影響や関わりがあり、考えてみるとお家の外の自然も同じだと改めて気づかされた。

ほとんどの自然史系博物館において、基本的な活動理念

は、自然の理解、自然の保護、自然の継承といったものだと思う。そして、これが社会的役割の根幹になっているだろう。この度のコロナ禍における博物館活動の中で考え直すべきと感じたことは、「自然」そのものの定義である。これまで自然史系博物館が扱ってきた自然は、意識しようとしまいと、人間の影響を排したものであり、人間の影響をできるだけ取り除いていくものだったのではないだろうか。そこから導かれることは、人間の行為、例えば森林伐採や開拓、干拓などの開発行為は、自然に悪影響を与えるというものになる。しかし、お家も人間もすべてひっくるめて自然と捉えると、考え方や価値観は変わってくる。

話は変わるが、国立科学博物館では、組織名や活動名において「教育普及」ではなく「学習

【最終回】人を観察する。



う。サピエンスは賢いという意味です。（川上靖）

2020年5月21日

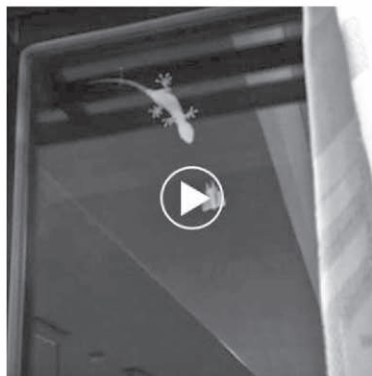
サピエンスについてはこちらどうぞ→[ジオフィールドVol.29](#)

この連載も最終回。おうちを巣にしている動物、人（ホモ・サピエンス）を観察せずして終わるわけにはいかないでしょう。

SARS、MERS、エイズ、エボラ、ジカ熱、麻疹、インフルエンザ、鳥インフル、そして新型コロナウイルスなど、すべてのウイルス感染症は動物が由来。そして人も動物。出会うはずのなかった動物同士、人と動物。近年の感染症の多発は偶然なのでしょうか？ そしてこれからは…。

人という動物はどうしてゆけばよいのでしょうか。

【謝辞】お読みいただき、ありがとうございました。



「おうちで自然観察」いかがでしたか。

これからも、夏には夏の、秋には秋の、冬には冬の自然を観察できます。夏は岩ガキ、冬は松葉ガニ、楽しみです！

私たち人という動物も自然の一部。ならば、おうちも街も自然です。おうちで自然観察、新しい生活様式としていただけたら幸いです。

夜、窓を見ると、目をみはる自然の世界が…。ヤモリ（家守）はおうちを守ってるってホントかなあ。（自然担当一同）

2020年5月22日

図 3. 最終回「人を観察する。」と「謝辞」

支援」という用語が使われている。教育普及の用語は古くから使われているが、定義がはっきりしないまま曖昧に使われ続けているもので、私は近年の博物館活動の実態に合っていないと感じている。教育とは、こちら側が目標を設定し、意図的に働きかけ教えることであり、利用者は受動的である。一方、学習とは能動的に自らの意思で学び成長することであり、現在の博物館の活動はこちらになっていると思うのである。博物館における活動が学習支援であるなら、自らの学びの支援であるので、そこに正解の答えはなく、答えはさまざまとなる。

コロナ禍における『おうちで自然観察』を行った中で、私は、あるひとつの価値観や自然観に基づいて活動が行われるのは好ましくないと考えようになった。価値観は「良い／悪い」を決定してしまうので、ひとつの価値観に基づくと、答えはひとつで、それを教えて普及することになってしまう。そもそも価値観や自然観は時代により変わってきたし、これからも変わるものである。博物館とは過去を知ることにより、新しい価値観や自然観が生みだされていく場所であり、それこそ社会的役割ではないかと思うのである。そのためには、展示や講座などすべての活動において、既存の価値観や自然観に基づかないことが重要になってくる。

展示や講座などを、既存の価値観や自然観に基づかない活動にするということは、その基となる資料の収集から、そのように考えていく必要がある。つまり、人間の影響のあるものも自然資料とするということである。例えば、『おうちで自然観察』で取り上げた硯や碁石をはじめ、筆や毛皮などまで扱っていくのがよいと思う。これらの人間と関わりのあるものは、人文分野や美術分野で収集されているわけだが、人間の行為による資料としてみるのではなく、自然の視点でみていくという意味である。

現在の自然史系博物館では、生物、山や森、海や川などの好きな人たちがそういう人たちを呼び、それが繰り返され、価値観や自然観が画一化しているのではないだろうか。このことは、そうでない方々との間に対立の構図を生みだしている気もする。この生物は守るべきなのか、この外来種は駆除すべきなのか、この森は大切なのか、この山は開発してよいのかなど、これらは価値観である。さまざまな人が集まり、こういった価値観を考えることが社会的に必要なことであり、博物館という場所は既存の価値観に揺さぶりをかける場所であるべきだと思うのである。過去を知ることが、今の価値観を揺さぶることに適しているとも思う。今後、既存の価値観を揺さぶっていくための活動を、提供手段もふくめて、多くの方々と議論しながら考えていきたいと思っている。

最後に、私の思いつきだった『おうちで自然観察』の企画を熱心に議論して実施してくれた当館の自然担当の皆さん、SNSでの発信に尽力してくれた普及担当の皆さん、そしてさまざまな意見や感想を寄せて盛り上げてくれた皆さんに心よりお礼を申し上げて、この報告を閉じる。

* エマ・マリス（岸由二・小宮繁訳）（2018）『「自然」という幻想：多自然ガーデニングによる新しい自然保護』草思社。そのほか、フレッド・ピアス（藤井留美訳）（2016）『外来種は本当に悪者か？：新しい野生 THE NEW WILD』草思社、メノ・スヒルトハウゼン（岸由二・小宮繁訳）（2020）『都市で進化する生物たち：“ダーウィン”が街にやってくる』草思社なども参考になる。

